

日本体育学会  
体育哲学専門領域

# 会報

Vol.17(1), April, 2013

## 記事

- ♪ 巻頭言&会長挨拶
- ♪ 運営委員長挨拶
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 2013 箱根合宿研究会のお知らせ
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門領域研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

## 巻頭言

&

会長からのご挨拶

「時の流れに身をまかせ・・・」

久保 正秋（東海大学）

最近、「時間」というものについて考えている。「時は流れる」という当たり前のことへの疑問である。確かにこうしている間も時計の針はひとつひとつ時を刻んでいる。原稿の切れはまたひとつ近づき、人生のひとつが失われた。「時間」は人間の心や意識とは関係なしに、過去、現在、未来へと、規則正しく「水平」に流れていくものであるという認識が一般的である。よって「時の流れに身をまかせ（テレサ・テン）」ということになる。しかし、こんな小間切れに刻まれた「時」の集合体、その流れが「時間」なのであろうか。

昔、こんなマンガを読んだことがある。波瀾万丈の人生を送っている主人公がふっと気が付くと、監獄の中で一本のローソクの炎をじっと見つめている、というものである。この「時間」は過去から未来へと均一に直線的に流れているのではなく、心や意識に依存している。そういえば、友人と飲み交わす時間はあっという間に過ぎ去る。人を待つ時間はとてつもなく長い。「時間」は量的で客観的なものではなく、カントが言うように質的で主観的なものと考えた方が良いのかもしれない。ここで私の「過去」と呼ばれる「時間」を振り返ってみる。

私がこの研究領域に足を踏み入れたのは三十数年前のことになる。勤務先で「体育原理」の授業を担当することになり、専門外であった私はなんとか情報を仕入れ、箱根で行われていると聞いた体育原理専門分科会（当時）の夏期合宿研究会に恐る恐る参加した。ここでは、書籍で名前しか知らなかった大先生たちが、生で、体育を、スポーツを論じていた。大先生たちは「雲上人」と呼ばれていた（宿舎の最上階が大先生たちの部屋だったため）。

なんとか名前を覚えてもらおうと懇親会で、『私の専門は心理ですが、今日から「心」から「原」へ一字変わります』とか言って自己紹介し、「では一曲歌います」と歌った。その当時のことを志々田先生（早稲田大学）が覚えていて、今も時々からかわれる。合宿の昼休みには若手の研究者たちが喫茶店に集い、何やら論じている。私にはよくわからない言葉が飛び交っている。その代表格であった佐藤先生（筑波大学名誉教授）に私は、「何故、古典を研究するのですか」と聞いた。「それは、現在を知るため」という答えが返ってきた。なるほど。

それから、時が流れた。時は流れずとも、歳は取った。合宿研究会の会場も箱根の太陽山荘から静雲荘へと、「体育原理」は「体育哲学」へ、「専門分科会」は「専門領域」へと変わった。当時の「雲上人」たちも多くは不帰の客となり、あ那时的の若手研究者たちは「体育哲学」の後期高齢者となった。そして今、私は「体育哲学専門領域」の会長の任に就こうとしている。

「過去は未来と同じく空虚であり、未来もまた過去と同じく死んだものである」とバシユールは言う。「過去」を単に振り返るだけでは何も生まれない。「未来」を夢見るだけでは何も生み出せない。重要なのは「いま」と「ここ」。瞬間、瞬間に湧き出てくる「現在」である。「未来の意味と力は現在そのものの中に登録されている」のであり、「未来」とは「われわれの方向にやってくるもの」ではなく、「その方向にわれわれが出向いていくもの」(バシユール)である。さて、会長として何処に出向いていくべきか。それとも「時の流れに身をまかせ・・・」。

久保 正秋 (kubo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp)

### 運営委員長からのご挨拶

深澤 浩洋 (筑波大学)

今年度より運営委員長を拝命いたしました。若輩者で何かと至らぬ点多いことと存じますが、先輩諸兄の皆様方からのご指導ご支援ならびに新進気鋭の若手研究者の皆様方からのご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

服部豊示前委員長からバトンを引き継ぐこととなりますが、正直、世代間のギャップを多少なりとも感じざるを得ません。が、これも何かしら変化の表れとして受け止めていただけましたら幸いにございます。ここ数年来、運営委員会では、日本体育・スポーツ哲学会との連携が話題に上っております。若手の育成やこの領域に対する関心の喚起、新規会員の獲得といった必要性を強く意識するようになったことがその背景にあります。

ただそれは、会員数の微減傾向に対する危機意識だけに基づくわけではないように思います。例えば、定例研究会では、専門領域外の先生を発表者としてお招きすることがありますが、そのお話には、体育哲学に対する期待や思いが込められているように感じられますし、そのような機会に私たちとの交流を楽しんでおられる様子を窺うことができます。また、体育・スポーツをめぐる昨今の諸問題に対し、何らかの回答やそれまで看過されがちだった事柄を根本から問い直す姿勢などをこの領域に期待する向きもあるでしょう。しかしながら、そうした光景を目にすることはあっても、それが実際の会員増に繋がっているわけではありません。つまり、体育哲学専門領域の魅力(温かみのある人間関係を含む)や研究の面白さ、存在意義といったものを十分に伝えられていない・うまく発信できていない、といったある種のもどかしさがこうした意識にはあるような気がいたします。

したがって、この領域が有する潜在力を引き出していくことが一つの課題であると考えます。私たちの活動がさらに深化・充実したものとなりますよう、会員の皆様方からのお力添えを賜ることができましたら幸いに存じます。また、運営委員会の構成も(平均年齢を計算したわけではありませんが、おそらく若干)若返り、より一層活発な学会活動を展開する態勢を整えることができるものと期待しております。本専門領域の活動に対し、様々なご意見、ご要望、アイデアをお寄せいただければ、柔軟な発想でもって(時に迷い、深く考え)それらを形にしていきたいと思っております。ご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

深澤 浩洋 (fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp)

## 滝沢 文雄 (千葉大学)

大学教員になったのは研究職に憧れていたからです。しかし現実には甘くなく、着任時から実技科目を中心に年間 20 数コマを行い、ここ 15 年ほどは学部運営に時間を取られ、落ち着いて物事を考える時間を持ってませんでした。本年度からはやっと役職から解放され、長年希望してきた職務に集中できそうです。これまでは表面的な体育哲学者でしたが、これからは実質的な体育哲学の研究者になろうと、気持ちを新たにしています。定年まであと四年ですが、こだわりを持った地道な研究を積み重ねたいと考えています。

哲学することは知を愛することだと多くの人が言っています。もしそうなら、体育哲学が扱う問題は、身体・運動・教育に関連すればどんなことでも構わない、と個人的には考えています。しかも、その考察方法は確立されたものでなくとも良い、と思っています。しかし、いい加減な方法が許されるわけではありません。新たな知を生み出すためには、方法がとても重要ですので、方法自体を探求することが、体育哲学には含まれていると考えています。誰もが納得する知を生み出すための方法です。私は卒業論文で現象学に出会い、それ以来 E. フッサールの現象学を中心に思索してきました。そのフッサールは、厳密な学としての哲学を目指し、本質を求める真摯な態度は揺らぎませんでしたが、明確な研究方法を提示しているとは思えません。彼は最後まで厳密な方法を探し続けていたのではないのでしょうか。

本質的な知を求めるためには、先行研究にあたり、検討することが不可欠です。が、その検討は、問題がどこまで議論されているのかを確認する作業であって、みずからの主張や結論を先人に語らせるためではない、と思っています。ですから考察においては、特定の研究者の主張としてではなく、論理的帰結として成立する知を提示することが重要なのではないのでしょうか。さらに、体育哲学にこだわるなら、このような哲学的態度で、実践を視野に入れた考察をすることが必要になると考えています。通常、理論と実践は対立する概念ですが、目の前の具体的な実践例にこそ、理論が備わっています。仮説的な理論を実践に当て嵌め、実践を整理することは必要でしょうが、それ以上に、理論と実践を捉え直すことはとても興味深いことだと思っています。

これまでの体験を通して感ずることは、大学という研究機関において、しかも教育学部という多才な人材の中で、体育哲学の独自性を明確にし、その学問的な地位を確立しなければならない、という思いです。現状では、まだまだそのための知の蓄積が不足しているようです。知を蓄えるためには、個々人の努力だけではなく、多くの仲間を作る必要があります。年配者が研究環境を整え、中堅が研究を深め、それによって若手を育てる必要があるでしょう。新たな研究仲間を増やすことは、これからも大きな課題だと言えます。

以上、自分に言い聞かせるために述べてきましたが、スポーツ実践を楽しみながら、体育にかかわって幾つもの問いを立て続け、その答えとなる知を求めて仲間と共に遊びたい、というのが本音です。広範な問題群と、それに対して様々な見解と方法が許されるのが体育哲学という領域だと思います。だからこそ、時代の要請に応えることだけでなく、より多くの研究仲間が、本質的な知を目指すとともに、体育哲学のおもしろさを次の世代に伝えてほしいとも思っています。

滝沢 文雄 (takizawa@faculty.chiba-u.jp)

## 書籍紹介

### アマルティア・セン：池本幸生訳(2012)『正義のアイデア』

明石書店．松宮 智生（国士舘大学体育研究所 特別研究員）

著者のアマルティア・セン（1933～）は、1998年にノーベル経済学賞を受賞したインドの経済学者です。本書の原題は“The Idea of Justice”です。しかし、いわゆる正義論（The Theory of Justice）とは趣が異なります。センは、「何が正義なのか」という議論は現実の問題を解決するうえであまり意味がないと考えているようです。

センは、前著『不平等の再検討』（岩波書店、1999年）では、ケイパビリティ（capability）によって人の暮らしを捉えるアプローチの有効性を説きました（ケイパビリティは、前著では「潜在能力」の訳語が充てられましたが、本書では、そのまま「ケイパビリティ」と表記されています。（私は、ケイパビリティを「人生の可能性の総体」と捉えています）。GDPなどの所得アプローチから見た不平等ではなく、良き生（well-being）を実現するための自由の不平等に着目すべきであるという見解です。この見解からは、「貧困」が再定義されます。貧困とは、人のwell-beingにとって大事なもの、すなわちケイパビリティが不足・欠如している状態であるという定義です。つまり、ケイパビリティの拡大によるwell-beingの向上が貧困を克服することであり、人間の開発（development）でもある、とする考え方です。センのアプローチは、近年の途上国開発にも活かされ始めています。スポーツが開発のプログラムとして、途上国の人々のケイパビリティを拡大している事例も国連のレポートなどで報告されています。

本書『正義のアイデア』では、センは、正義を実現するためには、現に存在する不正義をどのように取り除くかを考えることが有効な現実的アプローチであり、現実の状態と現実から不正義を取り除いた状態との比較が必要であると主張しています。現実の選択肢を比較するうえで、「完全な正義とは何か」という議論は必要でもないし、十分でもない。つまり彼は、あるべき姿を示そうとするのではなく、不正義を取り除くことができる道筋を示そうとしているのです。その意味で彼の主張は、「アイデア」であり、「アプローチ」にすぎません。ケイパビリティの考え方も「ケイパビリティ・アプローチ」なのであって、「ケイパビリティ理論」ではないのです。

全4部18章の中で、私が特に興味をもったのは、「第Ⅲ部 正義の材料」の「第11章 暮らし、自由、ケイパビリティ」と「第13章 幸福、福祉、ケイパビリティ」です。この2つの章では、個人のwell-beingを捉えるにはどのような情報に着目すべきか、というアプローチが示されています。ただし、何を重視すべきか、例えば、ケイパビリティを貧困問題に應用しようとするとき、健康、教育、自尊心や誇りなどのどれに着目すべきなのかを体系的に論じているわけではありません。何が重要な機能であり、何が社会が保障すべき機能であるかは、我々の議論にゆだねられています。

訳者の解説によると、センのケイパビリティ・アプローチは、当初は、経済学の世界からの反応が鈍く、彼のアプローチを應用しようとしたのは、むしろ経済学以外の分野の人たちだったようです。経済学者からは敬遠される一方、農学、文化人類学、医学、教育学などの分野の研究者がケイパビリティに関心を示し、また経済学の所得アプローチに批判的な一般の人たちも関心を示しました。例えば、有機農業は所得で評価すれば、儲からないという理由で低く評価されますが、実践している農家は、所得よりも、安全な食品や健康や環境を重視しているでしょう。これらの側面は、経済学的にはほとんど評価されることはありません。しかし、ケイパビリティはそれを（所得に換算することなく）評価するものです。

このようなアプローチは、体育学、スポーツ科学でも応用できるように思えます。スポーツのプレーヤーたちは、スポーツを通じて自らのケイパビリティ、すなわち人生の可能性を拡大できます。しかし、スポーツのために、逆に可能性を削ってしまったたり、閉じてしまうことがないともいえません。不幸な例としては、スポーツ事故によって、スポーツ以外の身体的な活動までもが大きく制限されてしまう事例がありますし、体罰・暴力によってプレーヤーたちが心身にダメージを負い、スポーツから離れてしまう事態も起こっています。競技やキャリアにおける成功に拘泥し、他の可能性を犠牲にするような環境は、ケイパビリティを削減しているといえるかも知れません。このような現実直面して、どのようなケイパビリティに着目すべきなのかを考えることが、社会におけるスポーツの課題を解決するための有効なアプローチと考えることができます。センが提唱するケイパビリティ・アプローチには、よりよいスポーツの環境をデザインするための重要なヒントが含まれているように思えるのです。(ただ、スポーツの世界で、ケイパビリティをどう使うかを「我々」が議論するにあたって、「誰が」「どのように」判断し解決するのだろうか、ということに合わせて考えた時に、実は、なぜか一抹の不安を覚えてしまうのです。なぜだ。)

松宮 智生 (tmkmatu@yahoo.co.jp)

## 私の研究

## ダンスにおける「ダンサー」の存在とは何かを考える

三輪 亜希子 (名古屋女子大学短期大学部)

私は、修士論文において「海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーが捉える 20 世紀の舞踊と今後-コレオグラファーとの関係を中心に-」と題し、10 代という若い年齢から海外での活動を選択した貴重なダンサーを対象とした研究を行いました。日本では認識が薄いことですが、ダンサーが職業として成立している環境はヨーロッパやアメリカへ渡ると多数存在します。彼らは何故海外への進出を志したのか、そして彼らの活動期にあたる 20 世紀後半の舞踊全体についてどう捉えているのか、今後へのまなざしとは何か、といった内容を聞き出しました。論文では、得られた個別のインタビュー回答を独自に分類した項目表として再生させ、文献内容や彼らが慕ったコレオグラファーとの関係と絡ませて分析を行いました。コレオグラファーとは作品を作る責任者、作者のことを指します。彼らへインタビュー調査を行った際の印象は、真面目で誠実で、ストイック、そしてダンス文化がより良い発展を遂げるための自らの役割について絶えず考え続けている勇者のような正義感を持っている方々、というものでした。そうした彼らの意向を一語一句考察していく中で、ダンスにおける「ダンサー」の存在とは何かを根源的に追求したいという意欲が沸きました。ダンサーという生き方、ダンサーの精神力を明るみにすることが、現代を生きる私たちへのメッセージへと繋がるのではないかという希望を抱いています。

現代ダンスは 20 世紀初頭に台頭したモダンダンス以降、芸術的価値観に対する変容と共に名称を変えて存続しており、現在は「コンテンポラリーダンス」と呼ばれています。コンテンポラリーダンスの特徴を指し示す言葉の中に「今、ここにある表現」がありますが、これはダンサー一人一人の「生き様」が強く反映されると考えることができます。この考えに繋がるダンサーの発言としてインタビュー調査の中で印象的だった言葉があります。

「最近、(身体の)内側の感覚を探っています。例えばお腹が痛い日は、痛いまま動きを生み出していく。それに抵抗して偽りの自分がダンスをするのではないというか。」

この「素直な身体」をさらけ出すことがコンテンポラリーダンスを支えている魅力の一つです。

また、人間の「生」を根源的に考える時、そこには絶えず「変動」が伴うのではないのでしょうか。「変動」を示すものは世界的な事象のみでなく、日常の些細な瞬間にも人間は変化の連続の上に生きているでしょう。コンテンポラリーダンスにおいてさらけ出された「素直な身体」との対峙は、そうした変化の渦中に置き去りにされた人間に対して身体的共感を呼び、「触れていないけれど目の当りにすることで呼応する感覚」としての体験が「今、生きること」を考えるきっかけとしての「響き」を生み出します。これは、意味を除外した芸術性の高いコンテンポラリーダンスの特徴であり、人は一人一人違う事、その小さな差異を描写していくといった時代的価値を反映していると考えることが出来ます。

私は、ダンサーの果たす役割とは作品の演出を超えて観客が魅了されるこの「呼応する感覚」を誘発する事にあると考えています。つまり、ダンス作品が光を放つためにはコンセプトに様相を整えるだけでは実現せず、身体から生み出される表現が伴うことが不可欠なのです。ダンサーの身体は時に爆発的に、縦横無尽に空間を切り刻み、見えないエネルギーを空間へ幾重にも描いていきます。ダンサー自身による自己存在の認識が「素直な身体」を生み出すと考えていますが、マイナスの意味ではない「周りへの抵抗を諦める」という言葉や「振り切った表現」といった言い回しを利用するコレオグラファーにも昨今出会います。今後の研究を通して、この「素直な身体」についての深遠な意味を掘り下げたいと考えています。

三輪 亜希子 (amiwa@nagoya-wu.ac.jp)

## 夏期合宿研究会 in HAKONE

合宿研究会担当:大津 克哉(東海大学)

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。今回も土日・祝日(海の日)の日程を組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

期日:2013年7月13日(土)、14日(日)、15日(月、祝日)

場所:静雲荘

(住所)〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1320 (電話)0460-82-3591

小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり直進/道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
13日(土)						受付	研究会①					夕食		
14日(日)	朝食		研究会②		昼食*		研究会③					懇親会		
15日(月)	朝食		研究会④	事務協議	解散									

(\*は運営委員会)

☆特別企画:企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 otsu@tokai-u.jp までよろしくお願いたします。

☆費用：22,000円（予定）、去年と同額

- ・研究会参加費：3,000円
- ・宿泊費等：19,000円（全日程参加の場合／2泊朝夕食、懇親会費を含む）
- ・シングルでの宿泊も申し受けます。先着3名まで、追加料金：1泊2,000円（予定）
- ・学生、院生、研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆**6月24日（月）**必着にてお申込み下さい。

- ・Eメール：お名前、ご所属、連絡先、発表演題、宿泊のご予定（食事の有無を含む）について、東海大学大津（otsu@tokai-u.jp）までお知らせください。
- ・同封のハガキ：必要事項の記入と50円切手を貼付の上、送付してください。
- ・特に、部分参加の場合は、宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。  
[13夕食、13宿泊、14朝食、14昼食、14夕食、14宿泊、15朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7月5日（金）以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。

☆詳しい「プログラム」は、7月上旬にお送りする予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail: otsu@tokai-u.jp Tel: 0463-58-1211（代表） Fax: 0463-50-2056

お問い合わせは、なるべくE-mailまたはファクスをご利用下さい。

### 運営委員会より

釜崎 太（明治大学）

○平成25年度の活動計画

4月 中旬	会報第17巻第1号発行
5月 18日（土）	第1回定例研究会
6月 24日（月）	夏期合宿研究会申し込み締め切り
7月 上旬	夏期合宿研究会プログラム発送
13日（土）～15日（月）	夏期合宿研究会・運営委員会（定例）
8月 中旬	会報第17巻第2号発行
28日（水）～30日（金）	日本体育学会第64回大会・運営委員会（定例）・総会
11月 中旬	会報第17巻第3号発行
12月 上旬（土）	第2回定例研究会
2月 中旬	会報第17巻第4号発行
3月 上旬	第3回定例研究会
3月 31日	「体育哲学」第44号発行

○体育哲学専門領域新体制 2013-2014

平成25/26年度期 体育哲学専門領域役員・組織が決定しました。昨年度の体育哲学専門領域運営委員選挙で選出された運営委員（定員12名＋会長推薦6名）を中心に、以下の体制で運営することになります。

会長 久保正秋（東海大学）  
副会長 服部豊示（明治薬科大学）  
監事 佐々木究（山形大学），林英彰（京都教育大学）  
幹事 田中愛（武蔵大学）

★運営委員会（◎印は各担当の主任を示します）

運営委員長 深澤浩洋（筑波大学）  
同代行 阿部悟郎（仙台大学）  
庶務・会計担当 ◎釜崎太（明治大学），田井健太郎（長崎国際大学）  
研究担当 ◎関根正美（日本体育大学），畑孝幸（長崎大学），舛本直文（首都大学東京）  
大会企画担当 ◎石垣健二（新潟大学），阿部悟郎（仙台大学）  
広報担当 ◎小林日出至郎（新潟大学），高橋浩二（大阪産業大学）  
編集担当 ◎杉山英人（千葉大学），近藤良享（中京大学），大橋道雄（東京学芸大学）

★常設委員会

☆編集委員会（7月より）

委員： 杉山英人（千葉大学），関根正美（日本体育大学），森田啓（千葉工業大学），木庭康樹（広島大学），田中愛（武蔵大学）

☆学会大会企画運営委員会

委員長： 石垣健二（新潟大学）

委員： 佐々木究（山形大学），田井健太郎（長崎国際大学），大津克哉（東海大学）

同専門委員： 企画A 佐々木究（山形大学），田井健太郎（長崎国際大学）  
企画B 大津克哉（東海大学）

☆選挙管理委員会

委員長： 三原幹生（愛知教育大学）

委員： 河野清司（至学館大学）

☆規則・規定等整備検討専門委員会

委員長： 畑孝幸（長崎大学）

委員： 釜崎太（明治大学），森田啓（千葉工業大学），高根信吾（常葉大学）

★事務局 釜崎太（明治大学） E-mail:kamasaki@meiji.ac.jp  
〒101-8301 東京都杉並区永福 1-9-1 研究棟 103 明治大学法学部  
Tel(Fax)03-5300-1156

★編集事務局 深澤浩洋（筑波大学） E-mail:fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp  
（6月まで）

○体育哲学専門領域のHPについて

HPについてお知らせいたします。現在、下記のURLにてHPを公開しております。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

また、これに関するご意見もお寄せ下さい。

○「日本体育学会 64 回大会」について

あらためて情報提供させていただきます。本年度の学会大会の HP は、下記の URL にて閲覧することができます。

<http://www.jspe64.fc.ritsumeai.ac.jp/>

4月1日より第64回大会（in 立命館大学びわこ・くさつキャンパス）のオンライン参加・発表登録の受付が開始となりました。ご登録〆切は5月13日（月）厳守となっております。多数のご発表、ご参加をお願いいたします。

○「専門領域メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、「体育哲学専門領域」活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 [kamasaki@meiji.ac.jp](mailto:kamasaki@meiji.ac.jp) までご一報ください。
- 2) 登録完了後、[taiikutetsugaku@yahoogroups.jp](mailto:taiikutetsugaku@yahoogroups.jp) を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

**定例研究会のお知らせ**

**関根 正美(日本体育大学)**

平成 25 年度第 1 回定例研究会を 2013 年 5 月 18 日（土）に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後 18 時 00 分より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。発表のご希望がある方は釜崎（事務局）[kamasaki@meiji.ac.jp](mailto:kamasaki@meiji.ac.jp) までご連絡下さい。

- ・日 時：2013 年 5 月 18 日（土）15：15～17：30（予定）
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・7 階 1075 教室  
JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分  
東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分  
都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



## 発表内容（予定）

### 【発表①】松宮智生（国士舘大学体育研究所特別研究員）スポーツにおけるルールの妥当性に関する考察：ボクシングと総合格闘技を中心的素材に

スポーツにおけるルールの妥当性の根拠を(1)ゲームにおける妥当性と(2)社会規範との関係における妥当性という2つの側面から探求する。(1)については、スポーツ哲学における議論に法哲学の理論を応用する。(2)については、ボクシングと総合格闘技のルールを対象とし、それらのルールのあり方を「スポーツの公共性」の課題としてとらえ、学問横断的に考察を展開する。(1)(2)のそれぞれにおいて、妥当性の根拠を見出すためのアプローチを提示する。

### 【発表②】高橋浩二（大阪産業大学）実践的思考としての「ナビゲーション」

本発表では、登山やオリエンテーリングの技術である「ナビゲーション」を考察し、それを実践的思考として捉え直す。ナビゲーション技術には、「現在地の把握」、「プランニング」、「ルート維持」(村越, 2001)がある。これらを実践的思考として捉え直すことによって、これまで「動きながら考える」という抽象的表現によって示されてきた知を学習可能な身体知の一つとして説明したい。本発表では、それを「身体のナビゲーション」として紹介する。

### 【発表③】募集中

## 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は高橋浩二 (takahashi@spo.osaka-sandai.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

### 体育哲学専門領域会報第17巻第1号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域  
久保正秋（会長）  
編集者 小林日出至郎（広報委員長）  
発行日 平成24年4月19日  
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐2の町 8050  
新潟大学教育学部  
025-262-7075（直通）  
アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

### 【編集後記】

桜の季節です。体育哲学専門領域の活動にも新たな風が吹いています。春風「会報」1号が発刊されました。皆様の御蔭です。心から感謝申し上げます。T先生の active ability と、執筆者、運営委員、事務局、前運営委員等のご高配ご協力の賜物です。「会報」が、会員皆様の研究意欲や元気を益々、刺激し、この専門領域における研究の充実・深化、知的成果の連携、会員間の交流・活性化等に繋がることを心から願っております。今後とも、会員皆様のご尽力ご協力を切にお願い申し上げます。(K)